

秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

真澄

MASUMI
No.35



「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。

第73回企画コーナー展
 横浜市・増田生涯学習センター所蔵
高橋友鳳子
旧蔵コレクションと
真澄
 平成29年
 7月15日(土)～8月27日(日)

増田生涯学習センターには、文献資料等約六、七〇〇点からなる高橋友鳳子旧蔵コレクションがあります。
 高橋友鳳子。本名・高橋友蔵は、明治三十二年（一八九九）西成瀬村菅生に生まれ、地元にあつた大日本鉱業吉乃鉱業所に勤務した後、戦後、西成瀬村長二期、合併後の増田町教育長を四期務め、平成八年（一九九六）に亡くなりました。友鳳子は行政・教育行政のみならず、若いときから俳句を安藤和風・石井露月、和歌を若山牧水に学んだことから、文芸にも高い能力を発揮しました。そのため、コレクションの中には俳句や短歌に関する資料が多く、また稀覯本も少なくありません。その他、蔵書票や豆本類もこのコレクションを特色づける資料となっています。友鳳子を生んだ増田町は、昔から俳句などが盛んな土地柄でもありました。平成二年、コレクションは増田町によって一括購入され、それが現

在の横浜市に引き継がれて、増田生涯学習センター所蔵となっています。

菅江真澄資料センターでは、これまで企画コーナー展などの展示で、コレクションの中から俳諧や歴史関係の文献を紹介してきました。本展は、真澄を学習する上での関連資料をあらためて紹介したものです。

1 真澄が詠んだ句

秋田で発行された二冊の俳諧書に「真寿身」なる人物の句が載っています。秋田の俳諧研究者は、それを菅江真澄による句だとしています。

真澄は同時代、関鬼毛の『日雇嘲』に「菅江真澄のじょうかぶり」と記録され、また、「真澄を送る歩夫迷惑」と句にも詠われました（『太田町史』）。そのことから、「マスマ」は秋田では有名であったことがわかるため、他人が同じ音の俳号を使ったとは考えられないことも「真寿身」を「真澄」とする理由として挙げられます。

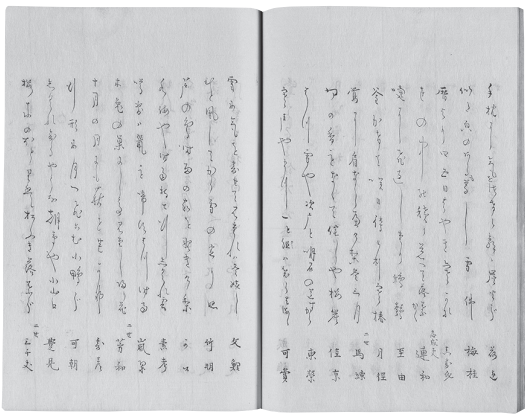
俳諧法華（版本）

吉川五明の没後十五年に当たつての追善句集として、文政二年（一一八九）三月、秋田・良栄堂から出版された。没後の五明門下の隆盛ぶりを世に示すため、五明の肖像を巻頭に掲げ、門人二一四名、国外俳人一七一名の句を集めている。この中に、「うかれ出て迷はば迷へ江戸の春 真寿身」とある。

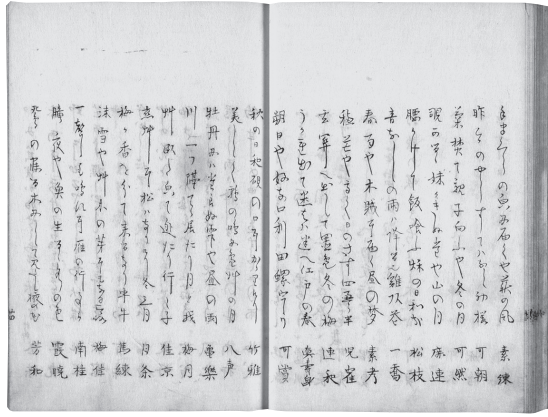
佐夜の月（版本）

吉川五明の高弟・土肥滑虹編の五明追悼句集。

刊記はないが、五明の十七回忌を引うために、文政三年（一一二〇）に成立したと考えられている。書名の「佐夜（さよ）」は、五明の小夜庵に由来する。この中に、「曆より四五日はやき寒さかな 真寿身」とある。



佐夜の月



俳諧法華

2 真澄の記録と俳諧書

真澄の交遊や著作と関係する俳諧書を紹介しました。

波羅都々美（版本）

編者と版下筆跡は吉川五明、画は五十嵐嵐児である。如琴（那珂通博）の序文に、寛政十年（一七九八）三月とある。片面に発句と画を入れたものが三十九丁（七十八人分）あり、発句だけのものが巻末に二丁ある。合わせて一一〇句入集している。発句の作者は五明と五明門人が主で、他に江戸、尾張、大坂、和泉佐野、南部、津軽に在住する五明の俳友の句がある。人物のしなやかな動きを描いた嵐児の画が見られる。

俳諧権三が弁（稿本）

真澄は『筆の山口』（文政五年（一一二二））で、乞食の権三が詠んだという「薦着てもおなじ句心の桜かな」が市中で話題になっていたことを記している。権三の話は、俳諧を趣味とした人たちの話題となり、権三に名を借りた世相批判も流行ったようだ。本資料は、権三が、乞食仲間の天王と長之丞を相手にユーモアを交えながら世相批判をし、俳諧を楽しんだという趣で書かれている。なお、『筆の山口』に書かれた句は、本資料には書かれていない。

3 秋田・俳諧史の書物

高橋友鳳子旧蔵コレクションには、秋田の俳諧史を語る上で、貴重な資料が含まれています。真澄の記述と合わせて紹介します。

八束穂集 春・冬 (版本)

江戸時代の秋田では、能代の修験・大光院桂葉が貞門派(※1)を流行させたが、次第に談林派(※2)に接近していった。このような中で、延宝八年(一六八〇)に版行されたのが本資料で、貞門派と談林派の句風が入り混じる。四冊のうち春と冬の二冊が現存する。収録俳人五五三人、総句数二一、一三五句で、地方編集としては大きな規模の出版となった。

桂葉と子の里鶯について、真澄は、俳諧に名のある人物として『雪の道奥雪の出羽路』に詳しく記している。

十六景・五一色・籠前栽 (版本)

秋田における蕉風(※3)俳諧の祖とされる梅津其筆(家老・梅津半右衛門忠昭)編の版本。天地人の三冊組だが、正徳二年(一七二二)・同三年・同五年と、天地人それぞれの出版年は異なる。天(十六景)は「捌田得月堂十六景」を中心に、門人や知人による四季の句が入り混じる。地(五一色)は、全編が歌仙。人(籠前栽)は、歌仙や各会合の句を集めている。

真澄は、『筆の山口』で其筆の句を紹介する中で、其筆が江戸の宝井其角(松尾芭蕉の高弟)の門人であることを註記している。

湯沢連 (稿本)

蕉風に対して平易な句風を掲げた一派に、秋田美濃派と呼ばれる俳人達がいた。特に県南は全域にわたって秋田美濃派がおり、指導役として山形新庄領金山の西田李英(羽長坊)がいた。本資料は、羽長坊が湯沢周辺の俳人の句から秀句を選んだものである。

真澄は羽長坊について、地誌『雪の出羽路』

平鹿郡三』で、羽長坊の著作とされる『仙北日記目録(仙北旧跡記)』を引くなどしている。

※1 貞門派：俳諧を俳言(漢語や俗語)で作る連歌と定義し、連歌の様式を平易にした。詠句は縁語や掛詞を多用し、故事や古典に基づく言語遊戯を特徴とした。文学を庶民の身近なものとしたが、言語遊戯は類型化しやすく、談林派の台頭を許した。

※2 談林派：江戸前期、西山宗因を指導者とする作風。大胆、奇抜な発想表現を追求し、従来の本歌取りに加えて謡曲や漢詩文を取り入れ、手法では破調や速吟を特徴とした。新奇さをねらった自由奔放な俳諧で、延宝元年(一六七三)から七、八年が最盛期であった。

※3 蕉風：松尾芭蕉が唱えた俳諧の流派。発句(連歌や連句の最初の句)に詩情を求め、和歌・漢詩の伝統を踏まえながら卑近な素材を活き活きと蘇らせることに成功した。さび(寂)などの理念を追求、連句では余情を重んじた。

4 コレクションの中の短冊

高橋友鳳子旧蔵コレクションには、およそ一、六〇〇点にも及ぶ短冊があります。内容は、歌(短歌)と俳句で、詠み手は秋田県内外の人物、時代は江戸時代から昭和までの幅広いものとなっています。真澄自身の短冊と、真澄と交流のあった人物の短冊を紹介しました。(短冊のルビは旧仮名遣いをしていきます。)

短冊を紹介した人物

●高階貞房：真澄と最も親しく交流した秋田藩士。

藩士。

進藤俊武：『筆の山口』に名前が出てくる。

●吉川忠行：『筆の山口』に、若き忠行の名が出てくる。兵衛家として知られるが、私塾で歌学や国学を教えた人物でもある。

●吉川五明：真澄が初めて秋田を訪れた天明五年(一七八五)、秋田俳壇の宗匠であった吉川五明を訪ねている。

●国谷金馬：横手の俳人。真澄と同時代の人物だが、実際の交流については不明。『雪の出羽路平鹿郡十三』に、蕉風俳諧で名が知られたことを書いている。

真澄の短冊

江 菅(いりえのすげ)

みしま江にみしますが笠たれもきて

ぬれつゝ刈らむ波のしら菅 真澄

出言恋(ことばにいつるこひ)

思かねそれとこと葉伊豆の海や

ふかき心のそこしらせむ 真澄

5 コレクションの中の軍記

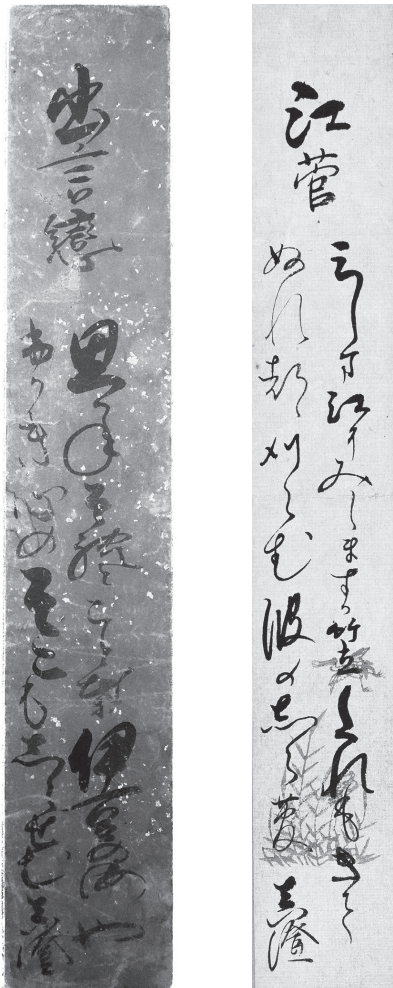
高橋友鳳子旧蔵コレクションには、秋田に関わる軍記物があります。菅江真澄資料センターでは、平成二十二年度第五十四回企画コーナー展「真澄引用の軍記物」などで紹介しました。県内でも稀少な資料となっています。

展示では、寛文二年(一六六二)の版本『奥羽軍記』、稿本の『仙北小野寺軍記』(別名・小野寺興廃記)を紹介しました。

6 コレクションの中の真澄研究

高橋友鳳子旧蔵コレクションには、真澄研究史を語る上で欠かせない人物の図書や資料があります。

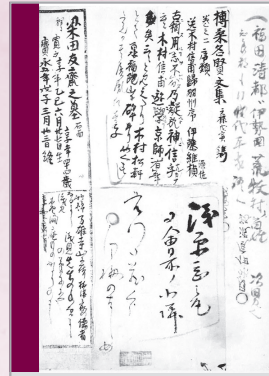
展示では、内田武志の著書、石川理紀之助の遺墨(短冊)、深澤多市の原稿、柳田国男の著書を紹介しました。



ざっさん 雑纂資料 の魅力

平成29年

10月14日(土)~12月10日(日)



菅江真澄には、下書きや覚え書き（メモ）、未完成の文章などを綴り合わせた書冊があります。それらを『菅江真澄全集』（未来社）では「雑纂」として、主に第十一巻にまとめて掲載しています。これらはまとまった記述ではないため、現代語訳を施されることもなく、ふだんは注目されることがありません。また、一般には読む必要を感じることもしない書冊と云えるでしょう。

一方で、雑纂には、そこにだけしか書かれていない文章や、真澄がどのようなことに関心を向けていたかがわかる文章などがあります。また、真澄の勉学のよつすが垣間見られる覚え書きがあるなど、「雑纂」資料には多くの魅力が潜んでいます。整った清書の文字とは異なり、雑纂に記された飾り気のない文字からは、真澄の息づかいが聞こえてきます。本展では、大館市立栗盛記念図書館が蔵する左記十冊の資料を中心に取り上げ、雑纂に

分類される資料の魅力を紹介しました。

風の落葉一、風の落葉二、風の落葉四、椎の葉、高志葉、混雑当座右日鈔、都田野塵束、風野塵泥、筆のしがらみ、陸奥国毛布郡一事

1、雑纂とは何か

「雑纂」を国語辞典で引くと、「種々雑多な記録、文書などを編集すること。また、そうしてできた書物」（『日本国語大辞典』）とあります。本展で取り上げた真澄の書冊（右でいう「書物」）を概観すると、①下書き、②未完成の原稿、③覚え書き、④書物の写しなどを綴り合わせた書冊として定義できます。

①下書きを綴る

雑纂に記された事柄は、部分的に真澄の著作に取り入れられていると考えることができま。そのことが端的に知られるのは、朱字で「入」などと書かれている箇所があるからです。雑纂には、随筆や地誌に取り入れられた下書きがあります。（展示資料／風の落葉三）

②未完成の原稿を綴る

一冊の書冊にまとめることがなかった、部分的な文章が残っているものがあります。（展示資料／筆のしがらみ）

■《筆のしがらみ》に「花のちりづか」の四丁が綴り込まれている。

花のちりづか…真澄による歌物語。巻頭右上に「志比能屋」とあることから、真澄が書齋を「椎ノ屋」から長野町小野寺道定家に移す文政五年（一八二二）四月以前にまとめられ

たと考えられる。料紙の柱に「花のちりづか」とあり、丁数が一〜四と打たれていることから、本格的にまとめようとしたことがわかる。

■《椎の葉》に「世々のふるつか」の三丁が綴り込まれている。

世々のふるつか…真澄は地誌《月の出羽路仙北郡九》に、古くて磨滅したような板碑などを「世々のふる塚」にまとめたが、人に貸して無くしたと書いている。《椎の葉》にある「世々のふるつか」は、塚に関する考証随筆となっている。そのうち、「ことひ塚」は、筆のまにまに八《うしいし》に取り入れられている。

■《風の落葉四》に「世々のふるあと」の六丁半（九項目）、《椎の葉》に同じく二丁（二項目で、前者と重複する）が綴り込まれている。

世々のふるあと…秋田にある古跡についての考証随筆である。《風の落葉四》と《椎の葉》にそれぞれあるが、《椎の葉》にある二項目（高清水岡といふ事を）「白磐須波のふたばしら」は、《風の落葉四》と重複する。《風の落葉四》にはさらに七項目あり、「瑜伽寺のふるあと」は後欠となっている。双方の料紙右上に「椎ノ葉」と記されているのは、書齋名の「椎ノ屋」に通じ、また、半丁の十二行は「椎ノ屋野紙」（本紙六頁参照）を下敷きにしたと考えられることから、真澄が書齋を「椎ノ屋」から長野町小野寺道定家に移す文政五年四月以前に書かれたと考えられる。

③覚え書きを綴る

雑纂には、辞書からの写しが書かれたり、調べたことを覚え書きにしたメモがあったりします。そこからは、真澄が文章を書く際の、

勉強のようすを垣間見ることが出来ます。（展示資料／風の落葉四、混雑当座右日鈔）

④書物の写しを綴る

真澄は文章を書く上で、他の文献を引用することがよくあります。それらの中には、真澄自らが、一時的に書き写したものもありました。雑纂には、そのような書物の写しが見られます。（展示資料／風野塵泥、風の落葉一）

2、秋田の書物を写す

雑纂には、秋田に関する書物が写されている場合があります。現在では、活字本として公刊されているものもありますが、秋田関係の書物でありながら、ほかには見られないものもあります。真澄が写した底本が何だったのかなど検討の余地があります。（展示資料／都田野塵束、御領分神社仏閣縁起（館蔵）、羽陰史略（当館寄託資料））

■《椎の葉》三丁半…【六郡祭事記】秋田領六郡における神社の祭日と内容を月日順に記述している。真澄が、明徳館助教那珂通博（碧峰）の撰としているのが注目される。活字本／新秋田叢書第三巻

■《風の落葉三》合わせて六丁…【人見日記】秋田の文人として知られる人見蕉雨の随筆で、秋田にまつわる史話や逸話をまとめています。写本が、『人見宇右衛門覚書』として大館市立栗盛記念図書館にある。翻刻／真澄研究第十九号

■《都田野塵束》二丁…【乞食袋】「真宮定基誌 一冊 随筆」として七項目写しているが、

他の内容については不明である。『秋田人名大辞典』（秋田魁新報社）では、歌をよくした藩士の真宮定広（一七五五―一八〇四）を著者としている。

■《都田野塵束》五丁…【羽陰史略】中村光得（？―一七二八）がまとめた編年体の私史。光得は『佐竹家譜』をまとめるために元禄九年（一六九六）に大和田内記とともに常陸に派遣された人物であるため、私史といえども公撰に変わりはないと『新秋田叢書』第一巻の解題にある。

■《都田野塵束》十六丁半…【古神社縁起】秋田領六郡の神社仏閣を書き出し、ところどころで縁起を簡単にまとめている。このことは、別本（館蔵）に「御領分神社仏閣縁起」の書名があることから知られる。

3、未完成本のすがた

真澄が完成を目指しながら、途中で書くのを止めてしまったと考えられるものがあります。これを「未完成本」と呼んでいます。真澄は、八郎湯周辺の事柄を、「おがたのつと」としてまとめようとしました。この原稿は、現在、『椎の葉』と『上津野の花ほか』に五丁（洋装本の十頁）見出すことができます。このように、雑纂に綴じられた内容から、完成本を推測することができます。（展示資料／椎の葉、上津野の花ほか（館蔵））

「おがたのつと」は、八郎湯周辺を周遊した際のみやげ物の意です。文章に記された年月、それに鳥屋長秋宛書簡（全集十二巻所収）に内容の一致を見い出せることから、文化十四

年（一八一七）八月から九月の記録であることがわかります。

料紙には、椎ノ屋野紙（十二行、左右双边、版心複線）が使われています。

■《上津野の花ほか》【料紙の柱に丁数なし。】二に相当

（要約）寺内村にある西来院前の庵に、盲人の法師が住んでいた。名を尋ねると、尾张国知多郡長尾の皆満寺の即成だと言う。即成は、前年夏におこなわれた西来院の洪鐘供養があつた時にちよど訪ねてきて、全長和尚の深い情けでこの庵に住むようになったのである。即成からこれまで詠んだ歌を聞いた後、真澄が尾張国熱田神宮の粟田知近を知っているかと尋ねると、即成は親しかったと答えた。

■《上津野の花ほか》【料紙の柱に「四」】

（要約）真澄は、夕方から鎌田正家の父である正安と寺内から高清水にかけて巡遊した。二人で西来院前の庵に住む即成法師を訪ね、歌を詠み合つた。翌十六日には、正家と語つているところに、本誓寺の是観上人が来たので、また歌を詠み合つた。十七日には、土崎湊の岩谷宗章から前日に贈つていた歌の返しとして、早く訪ねてくるようにとの返事があつた。（歌にある「もち月の月」「望月のかけ」などから、八月の記録であることがわかる。）

■《椎の葉》【料紙の柱に「五」】

（要約）鎌田正家と別れた真澄は、高清水を越えて、日蓮宗法興寺の近くにある岩谷宗章の住む松箏亭を訪ねた。次に法興寺に入った真澄は、四五年前、宗章、辰明、貞直らと山歩きなどをしたとき、にわか雨が降ってきたのでこの寺に雨宿りしたことや、一昨年秋のこ

ろに遷化した上人のことなどを思い出している。翌十八日には、風で落ちたたぐさんの松ぼっくりを子どもたちが拾い集めるのを見てみると、むねぶね（宗章、むねぶみ）、ときあきら（辰明）が訪ねてきた。

■《椎の葉》【料紙の柱に「九」】

（要約）二十四日には出立する予定であつたのを、雨のために取り止めた。二十五日になつて出立することにしたが、中途半端な時間なので、近くまでまず歩みを進めるとして、千代女と岩谷宗賀の両人と歌の贈答をした。

■《椎の葉》【料紙の柱に丁数なし。「九」の後部に相当】

（要約）（お堂にある）はなびこ面の裏に徳治二年（一三〇七）の銘がある。ことし文化十四年（一八一七）まで五百十一年になる。秋田路には番楽舞というものがあつた。五城目では「あそび」という。本居宣長が『玉勝間』に書くように、能は、もともと野で、野楽（のあそび）から言われはじめたものであろう。岩城と笠岡（ともに秋田市下新城）を経て、永全法師のところに着いた。九月一日、二日と、主と語りあつて過ごした。

4、真澄使用の用紙

真澄の自筆資料は、一部の書冊を除いて、野線も枠線もない用紙（無地の用紙）に書かれるのが普通です。ところが、雑纂資料を通覧してみると、無地の用紙のほかに、野紙や枠線のある用紙が挟み込まれていることがわかりました。これは、手元にあつた用紙をとりあえず使い、後でそれらを綴じ合わせたためと考えられます。それらが混ざっているこ

とも、雑纂資料の特徴の一つとなるでしょう。

真澄の自筆資料には、野線や枠線のある用紙が六種類使われています（個人蔵の一部資料を除く）。このうち、雑纂資料には三種類の用紙が使われています。左に示す書名のうち、傍線を付したのが雑纂の書名を示しています。

①十一行野紙（双边、版心単線）

・高志菜、椎の葉、風の落葉六、陸奥国毛布郡一事、百白之図（異文二）

②椎ノ屋野紙（十二行、左右双边、版心複線）

・高志菜、椎の葉、雪の山越え
③明徳館野紙（十行、单边、魚尾）

・しのはぐさ

④無野单边枠紙Ⅰ種（版心単線）

・百白之図（異文一）

⑤無野单边枠紙Ⅱ種（版心複線）

・椎の葉、雪の山越え、新古祝賀品類之図（全丁）、菅江真澄翁画、桜がり

⑥無野双边枠紙

・百白之図（異文二）
※野紙と枠紙の名称は、便宜的に付けたものです。

※「真澄使用の用紙」については、本紙6頁で紹介しています。

5、地域でまとめる

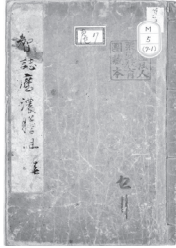
真澄が書いた文章や覚え書きが、地域でまとめられたものがあります。使っている用紙や字の書きぶりが異なることから、書いたあとで書冊として綴じたものと考えられます。（展示資料／高志菜、陸奥国毛布郡一事）

真澄使用の用紙

※色付きの書名は、雑纂を表しています。
 ※罫紙と枠紙の名称は、便宜的に付けたものです。

真澄が使う用紙はほとんどが無地ですが、まれに罫紙や枠線の入った紙を用いることがあります。その数は6種類になりました。（個人蔵の一部資料を除く。）


美濃紙半裁・無地
 (約19㍍×26㍍)



中本

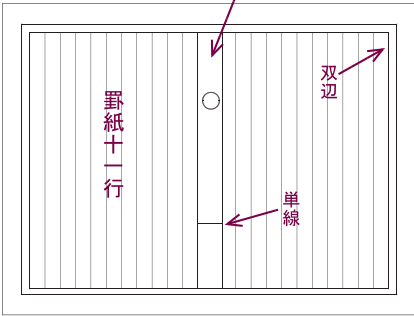
日記

半紙・無地
 (約24㍍×32㍍)



半紙本

地誌・図絵集・雑纂など



版心(柱)

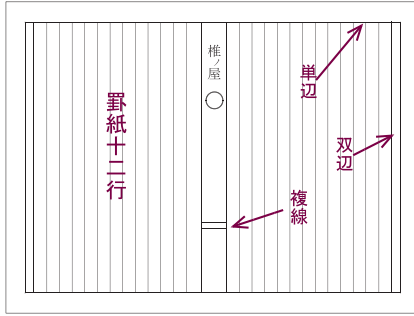
罫紙十一行

双边

単線

高志菜
 椎の葉
 風の落葉六
 陸奥国毛布郡一事
 百白之図(異文二)

① 十一行罫紙(双边、版心単線)



椎ノ屋

罫紙十二行

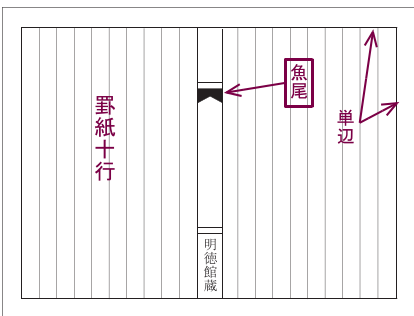
单边

双边

複線

高志菜
 椎の葉
 雪の山越え

② 椎ノ屋罫紙(12行、左右双边、版心複線)



罫紙十行

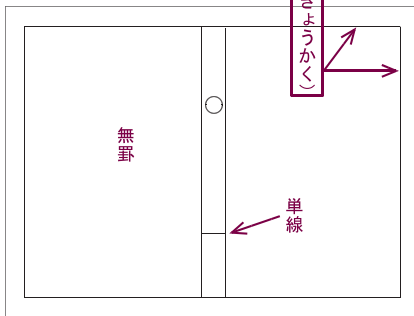
魚尾

单边

明德館蔵

しののはぐさ

③ 明德館罫紙(10行、单边、魚尾)



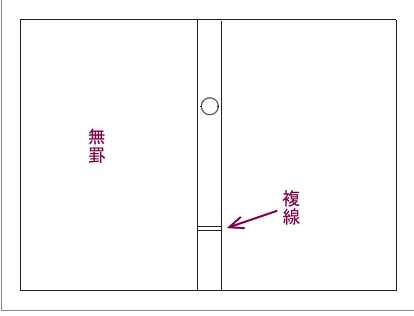
無罫

単線

国郭(きょうかく)

百白之図(異文一)

④ 無罫单边枠紙I種(版心単線)

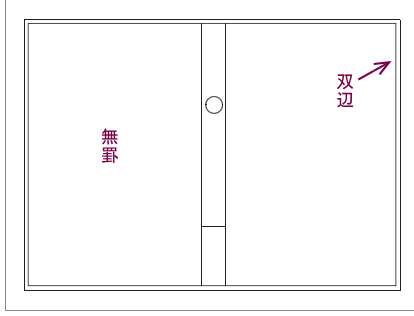


無罫

複線

椎の葉
 雪の山越え
 新古祝壺品類之図
 【全丁】
 菅江真澄翁画
 桜がり

⑤ 無罫单边枠紙II種(版心複線)



無罫

双边

百白之図(異文二)

⑥ 無罫双边枠紙

自筆本の特別公開

秋田の旅 14冊

平成29年

春期：5月23日(火)～6月11日(日)

雪の出羽路平鹿郡 14冊

平成29年

秋期：9月20日(水)～10月9日(月・祝)

重要文化財「菅江真澄遊覧記」八十九冊は、文政五年（一八二二）十二月、真澄自身が秋田藩校明德館に納めたものが中心に構成されています。当時から、他地域を知る紀行文として、また、秋田を知る書物として読まれてきました。時が移り、印刷物として公刊されるようになると、江戸時代後期の郷土を知る手がかりとして、いっそう注目されるようにもなりました。その一方で、遊覧記の特色のひとつが彩色された図絵であることから、カラーで図絵を見てみたい、写本ではなく実物を見てみたいという希望を、多くの方々が持つようになりました。

当館では、所蔵者である辻家（秋田市）の御理解と御協力を得て、昭和五十年開館時のテーマ展「菅江真澄と秋田の風土」をはじめ、企画展や特別展で何度か実物を紹介してきました。ただし、それは基本的には十年ごとに



自筆本の特別公開（春期）

おこなわれた真澄没後記念祭に際してのことです。また、平成十二年度からは、館内のパソコン（インターネット非接続）で実資料の全頁が見られるようになりましたが、実物を持つ色合いや雰囲気までは再現できません。

実資料である「菅江真澄遊覧記」はこれまで大事に保管されてきたため、現在でもその見事さは失われていません。実物が見られる機会を増やしてほしいとの要望も数多く寄せられています。展示スペースと資料保存の関係上、部分的・限定的な公開とはなりましたが、重要文化財「菅江真澄遊覧記」を公開しました。

なお、重要文化財「菅江真澄遊覧記」は、平成十年から当館の寄託資料となっており、普段非公開です。

※展示期間を三週間として、一週間ごとに開帖部分を替えました。

01 題籤 恩荷奴金風

体裁 全72丁、図絵38図

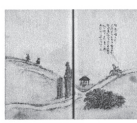
概要

文化元年8月～9月の約40日間の日記。東湖八坂神社の神事（統人行事）のことを詳細に記録した後、八郎瀧湖上で中秋の名月を楽しんだ。その後、寒風山から男鹿半島南端をまわり、八郎瀧西岸沿いに能代に至る。



男鹿の秋風

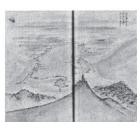
第一週 五月十三日(火)



追分三叉路（秋田市追分・潟上市追分）

当館の最寄り駅である追分駅、その近くの追分三叉路のようすである。三叉路には狐を刻んだ柱と、傍らには「道祖神 左男鹿道 右街道」の道標が立つ。馬に乗った人物が行く右手方向が羽州街道、ふたりの人物が行く左手方向が男鹿街道である。近くに榎の木があった。

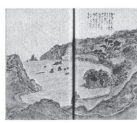
第二週 五月三十日(火)



寒風山からの眺め（男鹿市）

寒風山から八郎瀧を望むダイナミックな描法をとっている。現在、回転展望台のある頂には、かつて九輪の塔があった。現在と同様、景色を楽しむ5人ほどの人物を数えることができる。日本海を「汐海」、八郎瀧を「水海」と表記分けしている。

第三週 六月六日(火)～十一日(日)



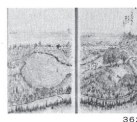
榎の浦（男鹿市榎）

丸い湾になった榎の浦に、ツバキをいただいた崎が突き出ている。現在は、ツバキの群生地として天然記念物に指定されている能登山である。本文によると、真澄はかつての旅で見た、ツバキの群生地として有名な夏泊半島の榎山、深浦の鱸作崎（いずれも青森県）を思い出していた。

秋田の旅 14冊 「男鹿の秋風」紹介パネル

平鹿郡八

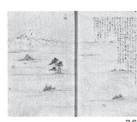
第一週 九月十日(水)



琵琶沼（浅舞）

琵琶の形に似ていることから、琵琶清水と呼ばれ真澄は記す。豊かな水をたたえ、図絵でも真ん中辺りで湧き出ようすが描かれている。真澄が「十二清水」として琵琶清水の周りに小さな清水を描くように、現在も周辺は清水が豊かな土地である。清流に棲むというキタノトミヨ（イバラトミヨ）の生息地としても知られる。

第二週 九月二十六日(火)



舞台の松（浅舞）

主題は、真ん中に見える松である。寛永8年（1631）秋8月20日の朝、丹頂鶴二羽がやってきて松の周りで舞い、それが数日続いた。第2代藩主佐竹義隆公がそれを吉兆として、この土地に朝舞（浅舞）と命名した。その「舞台の松」は枯れたが、文政8年（1825）に後継樹が植えられた。よって、松は想像図となる。

第三週 十月三日(火)～九日(月)



白藤神社の姥杉（中吉田）

描かれている社は、現在、白藤神社と呼ばれる。病人がこの社で夜籠をすると、その夜の夢に出てきた法師に、おこし火をかけられて汗をかく。すると、病気が必ず治ると真澄は書く。夢に出てくる法師を、大杉坊と呼ぶという。現在、清水の近くには、姥杉だけが立つ。

雪の出羽路平鹿郡 14冊 「平鹿郡八」紹介パネル

大館市立栗盛記念図書館・真崎コレクション展
平成二十九年九月三十日(土)・十月一日(日)

「真崎文庫、菅江真澄 周辺のことがら」

秋田県立博物館による出張展の一環として、標記展示をおこないました。昨年度の「真崎文庫の中の菅江真澄とその魅力」に続いての開催で、真崎文庫のうち、大館市指定文化財「真崎文庫」(県指定文化財「菅江真澄著作」を除く)からの展示となりました。

藩校明德館旧蔵本

菅江真澄遊覧記は、秋田藩校明德館の蔵書でした。それは、第一丁表に捺された「明德館図書章」印、それに「明德館書籍目録」(M—1200)の記載から知ることが出来ます。明德館の蔵書は、明治維新で散逸したとされていますが、大館市指定文化財「真崎文庫」には、明德館旧蔵本が十二点三十冊あることがわかりました。これらは、秋田にとっての宝物でもあります。



「明德館図書章」印

市文化財の真澄自筆資料(新出)

真崎文庫のうち、菅江真澄自筆のものは、「菅江真澄著作」(一部写本を含む)として県指定文化財となっていますが、大館市指定文化財「真崎文庫」にも真澄の自筆が含まれる資料があります。

ここでは、今年度新たに判明した真澄自筆資料(一部分が自筆)を三点紹介します。

一、群書類従(M—二八)(Mは請求記号)

堀保己ほりたけおが編纂した「群書類従」のうち、正編巻第三百三十六の版本で、「玉造小町子壮衰書一首并序」「新猿楽記」を内容とする。

第一丁右上に真澄所用印が捺されていることに加え、表紙に書かれている文字が真澄の自筆と判断できることから、真澄の手沢本であったことがわかる。

二、雄平仙河秋山補陀洛巡拝古跡記(M—111)

本資料は、一般に『秋田六郡三十三観音巡礼記』として知られる書冊である。表紙左上にある題簽、内題部分にある添書

中にある天註部分に真澄の文字が認められる。天註部分は朱字で書かれている。これにより、真澄の手沢本であったことがわかる。ただし、内題を含めた本文は他筆である。

三、書画帳(M—1411)

秋田俳壇で四世虫二房を名乗った土肥涓軒が、芭蕉翁の作風を継承すべく、句・歌・画を集めたものである。表紙裏の貼紙に、旧蔵者によって「真澄、臺、三河国菅井真澄」とある。真澄の歌と句になっているが「臺(台)」の署名と花押の組み合わせが珍しい。

【歌】竹間花といふことを 真澄

くれたけのしげみがくれに咲花も見えて葉分の風にはふ也

【句】梅が香や光櫺に風の色 臺(花押)

※大館市指定文化財「真崎文庫」における真澄自筆資料(一部が自筆)は、現在のところ九点を確認しています。詳しくは、『真澄研究』第二十二号(当館)で紹介しています。

大館市立栗盛記念図書館への改称について

平成二十九年四月一日、大館市立中央図書館が大館市立栗盛記念図書館に名称を変えました。これにより、昭和五十八年の改称まで使われていた旧称に戻ったこととなります。

これは、敷地に隣接していた栗盛家から土地を譲渡されて新たな閲覧室などを拡充したためですが、そもそも敷地・建物・蔵書類が栗盛教育団から譲渡されて、市立図書館の礎ができたことの記念への回帰ともなります。

学生の育成事業をおこなった栗盛教育団は、生活のために幼少年期に十分な教育を受けることができなかった栗盛吉右衛門によって設立されたものでした。

先人の偉業が大館市のみならず秋田県の文化事業の一端を担ってきたことを意識するためにも、再び「栗盛記念」を冠する旧称に戻ったことは有意義なことだと考えます。

大館市立栗盛記念図書館には、県指定文化財「菅江真澄著作」(指定四十六点)が含まれる「真崎文庫」があります。

これは、明治から大正時代の郷土史家であった真崎勇助が収集した古文書類二、一二七点考古資料約六、五〇〇点からなる一大コレクションであり、県指定文化財を除く古文書類は大館市指定文化財「真崎文庫」(指定二、〇八一点)になっています。秋田に関する古文書がほとんどで、それが図書館の大きな特長ともなっています。

菅江真澄資料センターが開設されて以来、大館市立中央図書館の名称を本紙「広報紙真澄」をはじめとする印刷物などに使ってきましたが、これからは「大館市立栗盛記念図書館」に置き換えてお読みください。(松山)

編集後記(表紙解説も兼ねて)

当館では毎月ギャラリートークをおこなっている。菅江真澄資料センター担当として今年度赴任した角崎大(つのざき・ひろむ)学芸主事も、毎月1回、テーマを決めた20~30分のギャラリートークを、多くは講読会のある日の午前におこなった。12月24日、サクラの職員も一人お願いしておこなったところ、なんと11名の方の参加があった。その時点での入館者の大部分(個人の印象です)に参加していただいたのではないだろうか。話がうまいのか、はたまた、「下北・津軽の旅」のテーマがよかったのか、いずれにしても御参加いただいた方々には感謝申し上げます。継続は力なり。よかったよかった。ギャラリートークは、月初めまでには、期日と内容をチラシやホームページでお知らせしています。機会がありましたら是非御参加ください。と、表紙の絵柄がようやく決まったことが、私にとって最大の朗報でした。(松山)

真澄 No.35

発行日◎平成30年3月20日
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足崎崎字後山52
Tel.018-873-4121(代)